

第一部

「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」 - その課題と前半期の実施計画 -

紀平英作

以下では、本プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」(以下、プログラムと略記)の全体課題と5年事業の実施態勢を、全体計画の目標、さらに現在活動を進めている13の研究班の配置を俯瞰する形で紹介する。なお、13研究班の個別目標およびその活動状況については、第四部において詳記するので、ここでは、それぞれの班が全体計画においてどのような位置を占めるかに力点を置いて叙述している。

・全体計画の目標と具体的課題

議論を、本事業全体の核となる鍵概念、「多元的」世界という問題関心からおこそう。

21世紀の初頭に立つわれわれの前に、現代の世界は、閉じた一元的体系によっては捉えきれない多様な豊かさと混沌をはらんだ「多元的」世界として開かれているようにみえる。それをわれわれは「グローバル化時代」とも呼ぶが、ここで、「多元的」と言うとき、実際には、社会的、文化的、さらには思想的な意味で少なくとも三つの位相があることに注意したい。

第一に、文化的多様性という意味での「多元的」世界がある。交通機関や通信技術の発達、世界的規模の文化的経済的交流を促進させ、異なる文化、異なる世界の発見、出会いを可能にし、また不可避にしてきた。われわれは今、文化的に異質で多様な「多元的」世界に直面している。

第二に、われわれの知の体系的統一を常に越えてゆく豊かさをもったものという意味で、われわれの前に「多元的」世界があることにも注目したい。現代の科学の発達は、そのようないっそう広い意味での世界の

「多元性」を開示している。現代の諸科学の成果はわれわれの予測を大きくはみ出し、複雑でときに矛盾する知の新領域を多様に押し開くことで、これまでの知の尺度によって測ることのできない世界を浮かび上がらせている。今日の世界は、既知の思考の枠組みに根本的な組み替えを迫っているといつてよい。

さらに第三に、その現代世界の原動力たる科学技術の一元的支配に対抗する、あえていえば科学技術なるものをも巻き込んだものとしての「多元的」世界があるであろう。現代の科学技術は、一つの文明として世界的規模で思想・価値・制度の一樣化・標準化をも押し進めている。とくに情報通信の技術は、地球規模における瞬時の情報伝達を可能にし、その一樣化・標準化の極端な形態を生み出しつつある。しかしそうした科学文明の一樣化・標準化は、歴史的風土的環境の中で経験的に形成されてきた個別の文化にとっては（現代科学の発生地であるヨーロッパをも含めて）異他的なるものとして意識されざるをえない。科学文明の一樣化に晒されたいところにおいて伝統的価値観・世界観に動揺が生じ、亀裂がはしるとしても無理からぬことである。その意味で、地球的規模で拡大しつつある一樣なる科学技術文明それ自身が「大いなる他者」として、「多元的」世界の一つの構成要素であり、「多元的」世界の中核に存しているとわれわれは理解する。ここに現代の「多元的」世界がわれわれに突きつけている問題の広がり複雑さがあると考えたいのである。

本プログラムは、以上のような「多元的」世界の歴史的形成過程と、さらにはその世界がはらむ問題の多面的な人文科学的解明をめざすものであり、京都大学文学研究科の歴史学系専攻・哲学系専攻・文学系専攻を基盤として、次の三プロジェクト（a～c）をひとまず組織することから計画をスタートさせている。

- (a)「グローバル化時代の多元的歴史学の構築
人類に共有される21世紀の世界史像を求めて」
- (b)「「多元的」世界と哲学知の課題」
- (c)「文学と言語にみる異文化意識」

以下、第～節では、この三つのプロジェクトにそくして、おのこの個別目標を示すとともに、そのもとに組織されている13の研究班の

配置を俯瞰したい。なお、研究の実施にあたって、事業担当者が活動の中心になるばかりか、学内外の多くの専門研究者を加え、さらには次の(a)～(e)のような計画を実施することにより、研究・教育両面における中核的拠点を、将来にわたって整備することをめざしている。教育計画を簡単に記す。

- (a) 広く、優秀なOD、PDを非常勤研究員として採用し、新領域の開拓を促すこと。
- (b) 多様な研究会を組織することで、教員と大学院博士課程院生の共同研究を活発化すること。
- (c) 優秀な外国人研究者を招聘し、さらには本プログラムの事業担当者を海外に派遣することにより、国際的共同研究あるいはシンポジウムをダイナミックに実施すること。
- (d) 若手の外国人研究者、日本学術振興会特別研究員、あるいは非常勤研究員の受け入れ条件を施設面、また財政的に整備することによって、研究拠点としての裾野を拡大すること。
- (e) さらに、博士課程大学院生、またODによる国際学会での発表を支援し、若い研究者の国際化ならびに博士学位取得を積極的に促すこと。

・「グローバル化時代の多元的歴史学の構築 人類に共有される21世紀の世界史像を求めて」プロジェクト

前節「全体計画の目標」で述べた三つの「多元的」世界を視野に入れつつ、歴史学分野は、グローバル化という人類が現在・未来にむかってすすむ新たな歴史状況をおしはかるために、世界史がたどった経緯を根元から振り返り、各地域の歴史を比較、対象する作業を通して、21世紀に向けての新しい多元的歴史学の構築をめざしている。

ここで多元的歴史学という意味は、次のような歴史認識に基づいている。

今日すすみつつある情報の瞬時伝達・瞬時共有は、共通の世界知覚と地球市民化という新現象を生む一方で、国境・地域の壁や中央・地方の差など、ありとあらゆる空間的な隔たりを相対比させ、長い間、人間社会を規定してきた構成原理を根本から変容せしめつつある。おそらくそれらは、人類史を通観しても画期的な変化に相違ない。しかしそうした

変化がめざましい勢いを示すほどに、他方で、ローカル、リージョナル、ナショナルといった多様なレベルで、グローバル化と背反するさまざまな動きやまとまりが以前にも増して意味あるものとして各地でよみがえり、活発化している。エスニシティの語で表現される人間集団のあり方や、それぞれの人びとのアイデンティティという複雑な問題が、地域や都市のもつ意味の変化などともからみあいつつ、われわれの根源的課題として浮上している。それはグローバル化というイメージで想起するにはあまりに複雑で、かつ多元的世界でもある。

以上の認識からすれば、グローバル化時代は、統合と多元という互いに異なるベクトルをもつ両極の波が、さしあたり対立・相克また並存しつつ展開していると理解してよい。その実情は、統合へのベクトルがより強く表れるヨーロッパにおいて表向きもっとも先鋭にみられるが、その実、統合と多元が対立、相克しているという意味では、中東、南・内陸・東アジア、南北アメリカ大陸、アフリカにおいても同様の状況が見られることは、注目しておかなければならないのである。新たなグローバル化の様相は、いずれの地域においても複雑という他ない。

このような位相のグローバル化という新しい歴史状況をふまえて、歴史学系専攻に属するグループは、グローバル化へと行き着く人類史の再検討を多元的歴史学の構築として試みようとする。具体的には、各教室が従来から蓄積してきた個別の研究領域を生かしながら、むしろ領域横断的なアプローチを積極的におこなうことを目指し、4つの研究班をつぎのようなテーマで発足させる。領域横断的とは、地域横断的であると共に、時代通観的でもあろうとする試みである。それらの班を軸とした研究会では、各領域において近年めざましい新資料の発見、実証の精密化などの局面を十分に汲み上げることでテーマ研究を深化させつつ、同時に、人類全体に共有される21世紀の世界史像を構築する基礎作業を進めることを全体の課題としている。

4つの研究班とは、つぎの通りである。(なお、以下、研究班には3つのプロジェクトを通して、一続きの通し番号をつけている。)

1. 「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班
2. 「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」研究班
3. 「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究班
4. 「王権とモニュメント」研究班

・「多元的」世界と哲学知の課題」プロジェクト

哲学分野がグループとして進めるプロジェクトは、「多元的」世界と哲学知の課題」と題する。そこでのグループ固有の目標から記そう。

・ においても記したように、21世紀の劈頭にあるわれわれの世界理解の図式は、たしかに今日大きく揺さぶられている。豊かさとともに混沌に満ちた「多元的」世界をいかに理解し、われわれの世界理解を再構築していくのか。哲学プロジェクトはその再構築の課題を、「多元的」世界をその総体において捉える試みから始めようと企画している。

その際プロジェクトが力点をおくのは、科学的知の人間存在にとっての意味という根本的問題にまで遡って考察する試みである。そこでわれわれが見ようとする「多元的」世界とは、自己の立場を徹底的に相対化する思想的反省を通して見えてくるはずのものであり、あえていえば対立する複数の中心を含んだものである。哲学知はそのような複数の中心を成り立たせている場そのものに関心の眼を注ぐべきであろう。われわれが生きる「多元的」世界を、哲学的考察を通して捉え、問題点を明らかにし、そこで果たすべき哲学知の課題を見据えつつ、将来への展望を切り開くことが本プロジェクトの共通の目標である。

そのような目標を視野に、プロジェクト全体は、以下の4つのサブグループから構成される。

(1) 第1グループ：「現代の思想的問題として「多元的」と「一元的」を検討するグループ

すでに述べたとおり20世紀における科学・技術の急速な発展は、多様な文化の交流を可能にする一方で、逆に世界を一面的に「標準化」するという側面をも内包した。たとえば情報通信の技術は、マイノリティの情報発信や地球規模での遠隔通信を可能にしたが、それすらも情報技術のなかに埋め込まれた特定の価値観や思考法から自由ではなかった。これは、最終的には、科学の目指す客観性や普遍性が、「方法」の一元性、とりわけ「普遍的言語」としての数理科学的方法によって保証されるといふ、近代特有の神話をもつ問題とつながっている。

哲学的営為がいまなお疑うことから始まるとするならば、まず「方法」の一元性という前提を、近代数理科学における「普遍」の形成過程に関する歴史的検討をふまえた上で相対化し、人間経験により相応した方法

の「多元性」の可能性を積極的に探ってみるべきであろう。

しかし、その一方で安易な「相対性」の主張が、たんに個別的なものの閉鎖的で相互排他的な「自律」の主張にとどまるのであれば、それはまた世界の混沌化をもたらすにすぎない。「標準化」「一様化」とは異なる普遍性の追求が、哲学知に求められている所以であり、このグループはその追求をめざす。

(2) 第2グループ：「歴史的経験への遡及」グループ

「多元的」世界の成立は、現代的な諸要因が累積した結果であるとともに、長い歴史的展開の到達点でもあった。人類は常に自己の生の枠組みに収まらない異質なものと接触を通じて、新たな文化を創造し発展させてきた。

このグループはそのような理解から「歴史的経験への遡及」を目指す。「哲学」的思考それ自体が、古典的ギリシア世界にとって異質なものとして発生するとともに、そこで確立された思考の基本的概念枠は中世のキリスト教信仰との連関や近世における非ヨーロッパ的世界との接触によって、多元的要素を包み込むことになった。このことは、狭義の哲学的思考だけではなく、芸術活動における人間の精神のありようでもあった。西欧におけるルネッサンス以降の絵画、日本における彫刻や絵画に見られる異質なものと接触とそれによる様式変容のプロセスには、統一性と多元性との微妙な関係を読み取ることができるのである。

(3) 第3グループ：「多元性をめぐる事象的・方法論的研究」グループ

「多元的」世界の考察には、さらに多様な文化・社会の事象的研究が不可欠であろう。事実、「多元的」世界は現実にはさまざまな軋轢を惹き起こす。その具体的状況は、第一に社会集団内部において、第二に社会集団相互間において把握されるべきであり、人々の制度や規範からの逸脱、異他なるものの排斥、異なる宗教間の争いといった事象に関して実証的に追求される必要がある。さらに「グローバル化」と呼ばれる世界的規模での標準化の進展によって、新しい種類の軋轢が生み出されていることにも注目したい。すなわち、各地域固有の宗教や文化や制度と、いわゆるグローバル・スタンダードとの間の齟齬や葛藤である。これらの種々の軋轢や葛藤は、多元的世界の内包する課題をわれわれに突きつけてくるが、しかしそれらの課題は、われわれが回復すべき生存の豊かさとともに新たに開発すべき人間の叡智を示すものでもある。

(4) 第4グループ：「新たな対話的思考法の構築」を目指すグループ

「多元的」世界は、さらに、一つの中心から組み立てられた閉じた「体系」思想では捉え切れない奥行きを持つ。多様で複数の中心を持つ世界に対応する柔軟かつ強靱な思考法が求められる。つまり「多元的」世界に対応する思考法は、他を認めず排除する思想・価値観をも含めて、様々な思想が世界には存在することを外から考察・思考するものではないのである。自ら一つの中心に立ちながら他を排除せず、自らの中心性をより開かれた豊かなものにし、さらに排他的他をも共通の開かれた場へ踏み出させる、そのような対話的思考法が重要な所以である。

プラトンが実在世界に相応しい思考法を対話的思考法（ディアレクティケー）と名付けたのになら、またヘーゲルが歴史的世界の論理として提起した弁証法（ディアレクティーク）を参照としつつ、新たな対話的思考法の構築を課題とする。

以上、(1) から (4) の研究を具体的に進めるものとして、組織されているのが以下の研究班である。

5. 「現代科学・技術・芸術と多元性の問題」研究班
6. 「規範性と多元性の歴史的諸相」研究班
7. 「多元的世界における寛容性についての研究」研究班
8. 「新たな対話的探求の論理の構築」研究班

・「文学と言語にみる異文化意識」プロジェクト

歴史学系専攻および哲学系専攻のプロジェクトに加えて本プログラムでは、文学系専攻を基礎として「文学と言語にみる異文化意識」プロジェクトを進める。その目標は、「多元的」世界の総合的な人文科学的解明にあるが、さしあたり文学分野に特化したものとして次の様な中間的目標を視野に作業を開始している。

人間文化の展開過程をふりかえるとき、過去から現在に至るまで、単一言語を基礎とした文化的共同体の形成へと向かおうとする期待が、各言語文化圏においてさまざな様相をとりつつ具体的に語られてきたことがわかる。また逆に、一元化の波への抵抗も、絶えず継続していたことが観察される。単一言語の汎用性を選ぶか、多言語を維持するか。それぞれの方向性の背後には、人間の普遍性を確信する態度と共に、逆に

地域・民族固有文化の多様性を尊重する態度がみられたのである。

これらふたつの方向性、あるいはふたつの態度は、人類の生んだ文化事象のうち文学・文献・言語において、とりわけ明瞭なすがたで現れる。異なる文化圏間の対話をすすめようとする今日、文学・文献・言語は、時間を越えて残された知識の堆積として、「普遍性を求める態度」と「多様性を尊重する態度」が葛藤する様、さらにはその共生に向けての問題解明の重要な手がかりを与えてくれるに違いない。それらは、われわれがもつ歴史的な知的財産であるばかりか、未来に伝えるべき資源でもあるからである。

他方、とくに18世紀末以来の言語研究の深化は、近年100年の文化理論形成に大きな影響を与えてもきている。「文学と言語にみる異文化意識」プロジェクトは、そのような研究の現状をふまえ、地域の枠を越えて、東西の文学・文献学に言語学を加えた総合的研究であろうとする。内容的にはつぎの(1)から(3)が小課題である。

(1)「異」とはなにか、「同」とはなにか

この分野では、「異」と言い、「同」と言われるのはなぜかを考えることから出発する。一見自明な「異」「同」は、実は20世紀の文化史の流れの中で普遍化されていったに過ぎないものではないか。たとえば、自らの言語文化と他の言語文化とを区別する意識はどのようにして出現したか。そして、なにに根拠を有するのか。こうした問題への解答は、個々の文化的伝統にとって、決して同じものではありえない。具体的な考察対象として、「自国(自地域)」と「他国(他地域)」、神界と人界、正統と異端、高雅と低俗、現在と過去などの「異、同」を設定し、文学・言語に焦点をしばりつつ、各文化における「異」「同」の意義、さらにはその歴史的展開を解明する。

(2)「異」への解釈と受容 - 「原典」と「翻訳」「選別(編集)」

さらに第2に、言語を伝達の媒体とするとき、「異」を自らのものとするために、必ず「翻訳」という作業が現れることに注目する。「翻訳」に至る前段階として、「選別」あるいは「編集」も行われる。このようにして生み出される産物は、翻訳に用いられた原典がもった地位を越え、移植された文化圏において大きな影響を与えるに至ることすらありうる。それはなぜか。どのような文脈におかれたとき、「翻訳」「選別」は新しい意義を賦与されるのか。さらに、「翻訳」に用いられた「原典」

資料はどのようなすがたをとっていたのか。文化圏間での文献移植が起きるとき、文字はどのように処理されるのか。訳者・編集者が目にした稿本・写本・初期刊本の収集、さらに原稿・写本・刊本類の文字解読・校訂技術の組織化、そうした方法論・技術を教育するシステムの研究をも進めなければならない。

(3) 文化圏・文明圏にとって「交流」とはなにか

最後に、(1) (2) の視点に配慮しつつ、各論として実際の言語文化接触をとりあげる。文化接触の研究にあたっては、従来からも、西洋と日本、日本と中国、欧米とイスラム、言語分布と通商圏、などの方向性が考えられてきた。19～20世紀における国民文化形成の全過程を見渡すことが出来る今日、「基層」「表層」「交流」といった観念そのものが、いかなる性格を持つのかを意識した言語文化接触の研究が可能となりつつある。

以上の(1)～(3)の観点を具体的に検討するものとして組織されているのが、つぎの5つの研究班である。

9. 「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究班
10. 「極東地域における文化交流」研究班
11. 「古代世界における学派・宗派の成立と<異>意識の形成」研究班
12. 「文学と言語を通してみたグローバル化の歴史」研究班
13. 「翻訳」の諸相」研究班

・小括

以上、三つのプロジェクトのもとに、現在13の研究班が活動しているが、さしあたりこれら13研究班は平成16年前半までに中間的な研究の総括を行う。16年度後半からは、それらの活動を見直し、さらに新たな展開をめざす新しい研究教育態勢を整備する予定であるが、その新しい態勢については第3回報告書で紹介したい。